

赤瀬遺跡発掘調査概要報告書

榛原町文化財調査概要 6

1991

榛原町教育委員会

序

赤瀬遺跡は、土木工事に伴う事前の踏査によってその存在が明らかとなった遺跡です。このたび、その一部の発掘調査を実施し、その調査結果を『棟原町文化財調査概要6』として刊行するはこびとなりました。これまで、棟原町の北東部は遺跡の希薄な地域と考えられがちでしたが、今回の発掘調査を契機として幾つかの遺跡を確認することができました。本書が少しでも今後の調査・研究に資するところがあれば幸いに存じます。

調査を実施するにあたり、奈良県教育委員会をはじめ、関係諸機関ならびに関係各位のご協力を賜り感謝いたします。

平成3年3月

棟原町教育委員会

教育長 山 尾 正 弘

例　　言

- 1 本書は、奈良県宇陀郡棟原町大字赤瀬に所在する赤瀬遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 2 発掘調査は、棟原町役場開発部産業課の依頼をうけて棟原町教育委員会社会教育課が実施した。
- 3 実測図・写真等の調査記録、遺物等は棟原町教育委員会において保管している。
- 4 本書は、柳沢が執筆、編集を担当した。

目　　次

第1章 調査の契機と経過.....	1
1 調査の契機と経過.....	1
2 現地調査日誌抄.....	1
第2章 位置と環境.....	2
1 地理的環境.....	2
2 歴史的環境.....	3
第3章 調査概要.....	7
第4章 遺　　物.....	10
第5章 ま　　と　　め.....	12
抄　　録.....	12

第1章 調査の契機と経過

1 調査の契機と経過

棟原町北東部の東棟原地区において、1988年度（昭和63年度）より棟原町が主体となって、農地造成を中心とする土地改良事業（事業名：新農業構造改善事業）が実施されているが、1990年度（平成2年度）は棟原町赤瀬地区の水田において、その事業が計画された。事業者である棟原町役場産業課は1989年8月28日付けで奈良県教育委員会教育長宛に遺跡有無確認踏査願を提出したところ、1989年11月2日付けで「東棟原小学校東方の水田で中世の土器片が採集されたため、試掘調査が必要。発掘通知を提出し、町教育委員会と協議のこと」との回答があった。その後、事業者等の関係で事業範囲が縮小され、1990年9月10日付けで埋蔵文化財発掘通知書が提出され、奈良県教育委員会、棟原町教育委員会、棟原町役場等がこの遺跡の取り扱い、調査の実施方法等について協議を行った。この結果、発掘調査は棟原町教育委員会が実施することとし、重要な遺構等が発見されれば、その保存等について改めてその取り扱いについて協議することとなった。

現地調査は1990年12月17日から1991年1月7日にかけて実施し、その後、報告書作成等の整理作業に入り、1991年3月30日に本事業を終えた。なお、調査関係者等は次のとおりである。

調査主体 棟原町教育委員会（教育長 山尾正弘）

調査担当課 棟原町教育委員会 社会教育課（課長 尾上博美）

庶務担当課 棟原町役場 開発部 産業課（課長 西岡博文）

調査担当者 棟原町教育委員会 社会教育課 技師 柳沢一宏

調査補助員 井上好美、森塚和彦、山本美恵子

調査作業員 池田圭子、小林幸代、棚田幸子、乾智津子、梶本弘子、高西綾子、半田百合子、藤村奈々子、藤村典子

調査指導 奈良県教育委員会

調査協力 赤瀬自治会、西峯美代治、柳沢尚子

2 現地調査日誌抄

1990年（平成2年）

12月26日（水）

12月17日（月）

第1トレンチ遺物包含層掘り下げ。各トレンチ写真撮影・平板測量。

器材搬入、写真撮影。第2トレンチ掘り下げ。

12月27日（木）

12月18日（火）～12月20日（木）

午前、第1トレンチ土層断面図作成。器材搬出。

第1トレンチ掘り下げ。須恵器出土。

1991年（平成3年）

第2トレンチ土層断面精査・土層断面図作成。

1月7日（月）

12月21日（金）・12月25日（火）

第1トレンチ遺物包含層掘り下げ。須恵器、土師器、

午前、周辺地域の踏査。

サヌカイト片等出土。

第2章 位置と環境

1 地理的環境

奈良県の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では、大宇陀町、棟原町、菟田野町、室生村、曾爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は、地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高300~400mの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも称され、大宇陀町、棟原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの峻しい山が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。

口宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら棟原町萩原で宇陀川本流となる。棟原を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

棟原町の四周は概ね標高約400~800mの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎ヶ岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とを区切る額井岳、香靜山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば棟原町の西半は口宇陀、東半は奥宇陀的な様相を呈している。

赤瀬遺跡の北方には、大和高原との境界ともなっている額井岳、香靜山、鳥見山などの山々が連なり、麓の遺跡群を見下ろしている。遺跡は香靜山の南東麓、標高約360~368mの北西から南東へ

と広がる谷部に位置する。この山麓には幾つもの谷が南方へと延びるが、この遺跡が位置する谷が最も広く、他の小さな谷を併せている。なお、棟原町の中心地である萩原からは北東約2kmの距離を測る。



図1 棟原町位置図

2 歴史的環境

宇陀地方、なかでも口宇陀地域には縄文時代以降、各所で多くの人々が生活を行い、その痕跡が「遺跡」となって、今の我々に、様々なことを教えてくれる。この反面、遺跡の多くは、開発事業によって改変、消滅の危機にさらされており、次代に引き継ぐべき「財産」は記録等によってその概要が伝えられるのみである。

株原町北東部の天満川、宮川、鰐守川の小支流域は、他の流域と比較すれば遺跡の分布は、やや散在的ではある。しかし、最近の分布調査等によってその数は増加傾向にあり、今回の周辺踏査によつても幾つかを確認している。縄文・弥生遺跡の詳細は明らかでないが、周辺では篠畠神社前遺跡や鳥見山中腹遺跡などから遺物が採集されている。他にもこの頃の遺跡の存在が十分に推定される。古墳時代となると横穴式石室を埋葬施設とする古墳が幾つか築かれるようになり、(仮称)赤瀬古墳群(写真1・2)、北谷古墳群、長峯古墳群、奥ノ芝古墳、原田古墳などが分布している。原田古墳は『大和國古墳墓取調書』にも記されていたが、「天満台」団地を造成した際に破壊されている。また、工事地内の数箇所で遺物等が出土したともいわれていることから、他にも幾つかの遺跡が消滅していることは十分考えられる。香醉山中腹には、平安時代の山寺・香醉寺との伝承がある平坦面群があり、地元では「リョウサン」詣りが行われている。香醉寺は『日本靈異記』に記された「真木原山寺」とも考えられているがその詳細は明らかでない。また、遺跡北方の尾根上には中世山城(赤瀬城跡?)可能性が考えられる平坦面や掘削りを確認している(図3)。



写真1 仮称 赤瀬1号墳



写真2 仮称 赤瀬2号墳



図2 周辺遺跡分布図

1972年測量

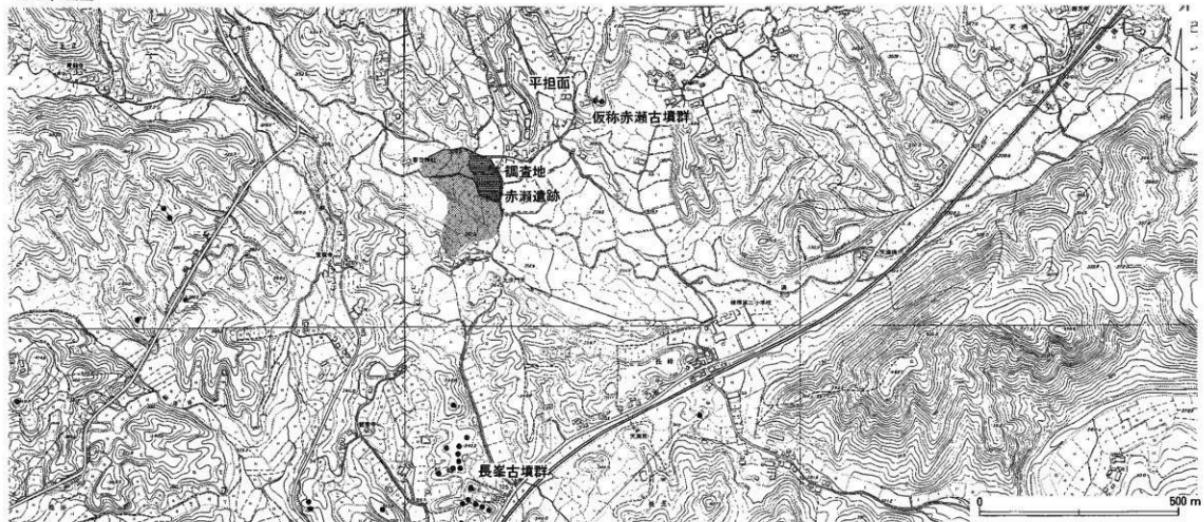


図3 赤瀬遺跡位置図

第3章 調査概要

赤瀬遺跡は、先述のとおり開発行為に先立って実施した踏査によって確認した遺物散布地である。当初の計画では、遺跡のほぼ全域が工事範囲に含まれていたが、その後の計画変更により、遺跡北東部の約1.8haが事業範囲となった。遺跡の範囲、遺構・遺物の有無等を確認するため、2箇所にトレンチを設定(図4)し、これらの確認につとめた。以下、各トレンチの調査概要を述べる。

第1トレンチ

基本土層は上から順に耕作土(第1層)、黄灰色砂礫(第2層)、青灰色粘質土(旧耕作土)・灰白色粘質土・橙灰色土(第3層)、灰褐色砂質土・暗褐色土・暗灰色砂質土(第4層)、そして第5層は棟原石の砂礫層からなる地山である。第2層は昭和12年の天満川氾濫時の堆積土、3層に細分される第4層は弥生時代～平安時代の遺物包含層となっている。現耕作面から地山面までの深さは約0.8～1.5mを測り、調査地の中央付近が比較的深くなっている。地山面は凹凸が著しく、明確な遺構は認められない(図5)。

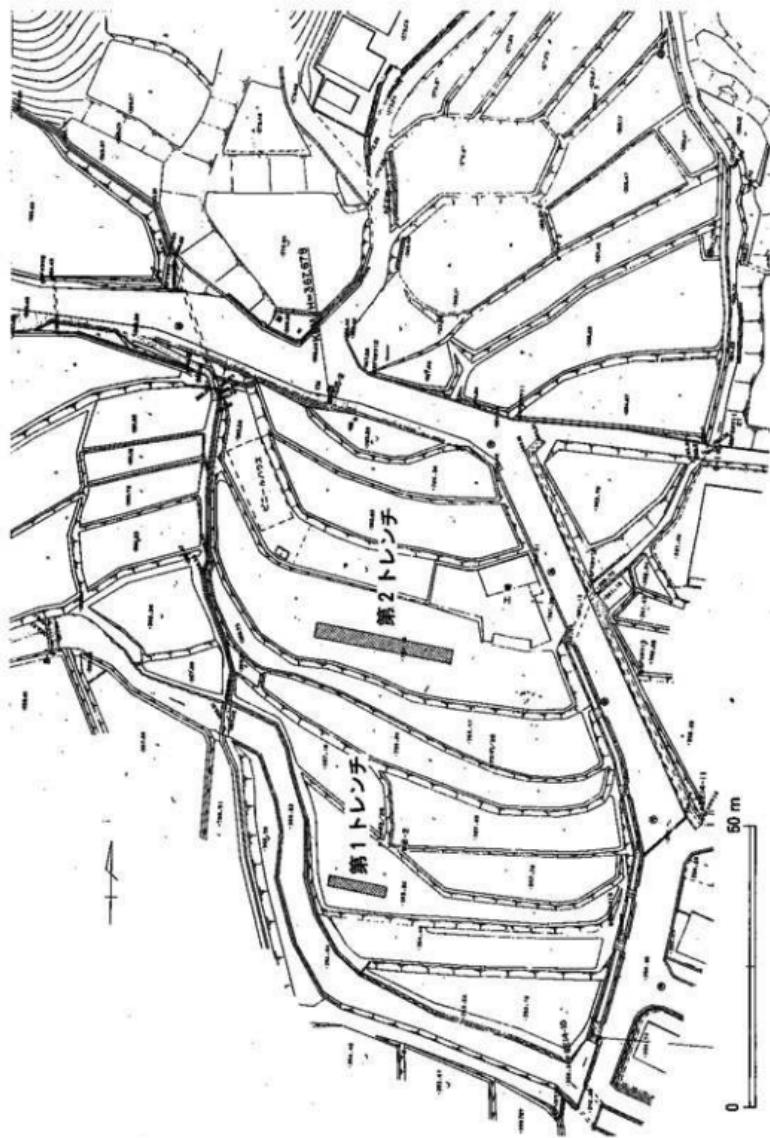
第2トレンチ

基本土層は上から順に耕作土(第1層)、茶灰色土(第2層)、暗褐色土(遺物包含層・第3層)、そして第4層は地山(風化花崗岩類・棟原石砂礫層)となっている。現耕作面から地山面までの深さは東半部で約0.5～0.6m、西半部で0.9～1.3mを測る。明確な遺構は認められない(図5)。



写真3 調査作業員の方々

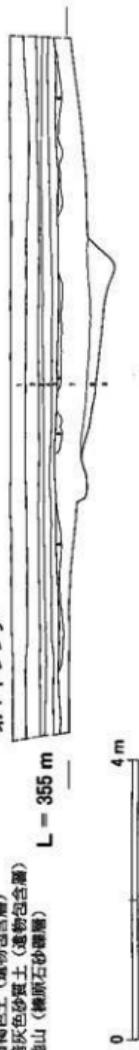
図4 水道建設調査位置図



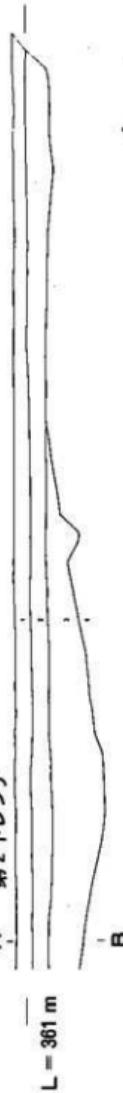
第1トレンチ土層名

1. 農作土
2. 黄灰色砂礫（1947年災害）
3. 青灰色粘土（旧耕作土）
4. 灰色粘土
5. 橙灰色土
6. 灰褐色砂質土（遺物包含層）
7. 暗褐色土（遺物包含層）
8. 暗灰色砂質土（遺物包含層）
9. 地山（標頭右砂礫層）

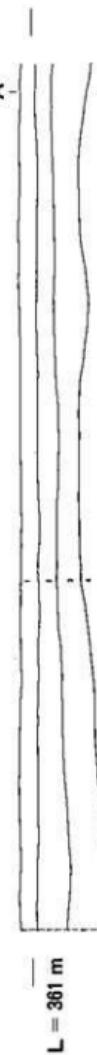
第1トレンチ



A 第2トレンチ



A



B

第2トレンチ土層名

1. 農作土
2. 深灰色土（やや粘質）
3. 暗褐色土
4. 地山（風化花崗岩塊）

図5 赤堀遺跡土層断面図

第4章 出土遺物

今回の発掘調査で弥生時代から中世にわたる遺物を検出・採集することができた。サヌカイト片、石鐵、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、土鉢などコンテナ整理箱2箱分を確認しているが、小片が多く、図化できたのは僅かである。これらは、採集資料を除いて第1トレンチ遺物包含層からの出土である。

1 土 器

(1) 土師器

杯、皿、高杯、甕の破片を確認している。

皿(図6-1、2) (1)の口縁部はやや内湾気味に外上方にのび、その端部で粘土を内側に折り返して丸くなじつけている。底部外面はヘラ削りによっている。復元口径14.4cm、器高2cmをはかる。(2)は復元口径16.8cm、現存高1.8cmをはかる。口縁部は外上方に直線的にのび、端部は尖り気味に仕上げる。ともに胎土は精良、焼成は良好、色調は橙色ないし、にぶい橙色を呈する。

高杯(図6-3) 脚柱部のみの破片のため、杯部、脚裾部の詳細は明らかでない。短い脚柱部はヘラ削りで面取り調整がなされ、断面形態は10ないし11角形に復元でき、現存高4.9cmを測る。胎土は精良、焼成は良好、色調は橙色である。

甕(図6-4) 口縁部の破片で、復元口径13.2cm、現存高4.2cmを測る。口縁部はほぼ直線的に外上方にのび、口縁端部は方形気味に丸くおさめる。内外面ともナヂ調整を施す。胎土は精良、焼成は良好、色調は浅黄橙色である。

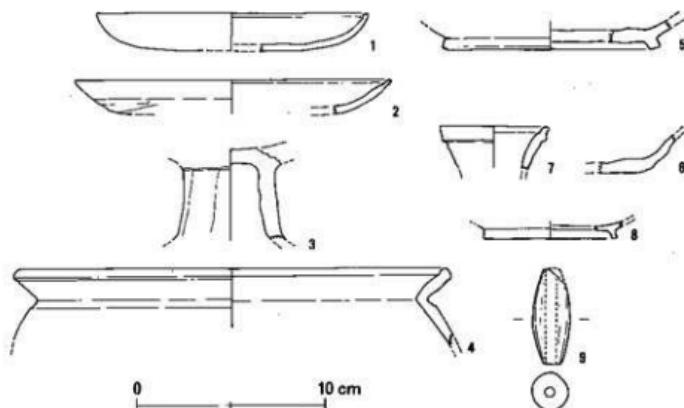


図6 赤瀬遺跡出土遺物実測図(1)

(2) 須恵器

杯、壺、甕の破片を確認している。

杯(図6-5、6) 細片が多いが、高台の有するもの、有しないものの2種類が認められる。(5)の高台は外下方に短くのび、断面形態は方形を呈する。復元高台径は11.6cmに復元できる。内外面とも横ナデ調整である。(6)は細片であるため、その法量等を復元できない。底部外面は不調整、その他は横ナデ調整によっている。ともに胎土は精良、焼成は堅緻、色調は灰色ないし灰白色を呈する。

壺(図6-7) 復元口径5.8cm、現存高2.2cmを測る。口縁端部はやや上方につまみ上げ、丸みのある突堤状を呈する。

(3) 黒色土器(図6-8)

杯底部の破片で、高台径を7.1cmに復元できる。高台は外傾状に張り付けられた細長いものである。内面は炭素吸着により黒色、外面はにぶい橙色を呈する。事業地内での採集資料である。

2 土製品(図6-9)

端部の一部を欠損する壺玉状の土錐である。現存長5cm、中央部径1.9cm、端部径0.9cm、孔径0.5~0.6cmを測る。胎土は精良、焼成は良好で、にぶい黄橙色を呈する。

3 石製品(図7-10・11)

第1トレンチ遺物包含層(第4層)からサヌカイト剥片4点、採集資料としてサヌカイト剥片6点、サヌカイト製の凹基無茎式石錐2点を確認している。錐は先端部がやや欠損するものの、ほぼ完形である。現存長1.8cm、最大幅1.4cm、最大厚0.4cm、現重量0.62gとなっている。全長は2cm程度と推定される。平面形態は二等辺三角形を呈し、基部は浅い「U」字状の抉り込み、脚部は左右非対称で、その端部は丸い。(11)は先端部が欠損し、現存長2.3cm、最大幅2.1cm、最大厚0.3cm、現重量1.18gである。平面形態は二等辺三角形、基部は浅い「U」字状に抉り込まれ、脚端部は丸味をもつ。

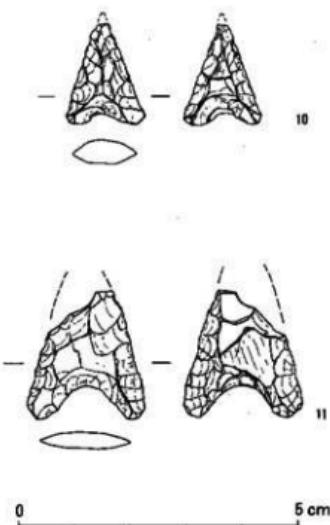


図7 赤瀬遺跡出土遺物実測図(2)

第5章 まとめ

僅かな面積を発掘調査したにすぎず、万全な調査とは言えないが、遺跡の内容等を知ることができた。以下、その概要をまとめておく。

遺物包含層からは、サヌカイト片、須恵器、土師器、土錘等が出土したもの、この下の地山面（砂礫層）からは明確な遺構は検出できなかった。調査地は洪水等が比較的おこりやすい谷地形でもあるため、居住等には適さないと考えられ、この周辺の丘陵部に居住域が存在する可能性がある。石鎚は縄文時代の所産、須恵器、土師器は奈良時代後期のものと考えられ、時期的には断絶が認められる。出土遺物からこの遺跡は、奈良時代以降、各時代へと継続しているようである。奈良時代の遺物が比較的多く出土していることから、周辺には寺院や官衙といった施設が存在していることも推定され、今後の調査によって解明していかなければならない課題である。

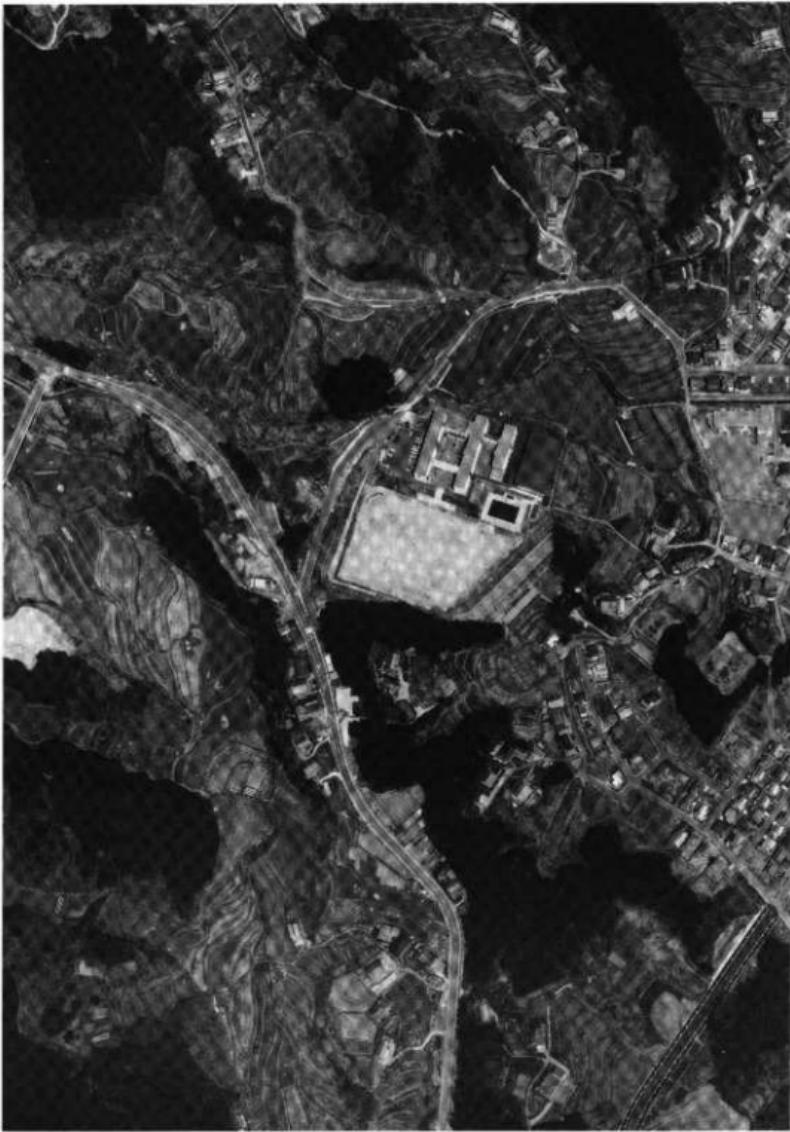
抄 錄

遺 跡 名	赤瀬遺跡（棟原町遺跡番号 1-112）
調 査 地	奈良県宇陀郡棟原町大字赤瀬303-2番地ほか (小字名：ミトシロ、前田、ヨセコチ、内垣ほか)
遺 跡 立 地	標高約360～366mの谷部
遺 跡 規 模	範囲：南北約250m、東西約150～200m 面積：約30,000m ²
種 別	縄文時代～中世の遺物散布地
調 査 名	赤瀬遺跡発掘調査事業
調 査 主 体	棟原町教育委員会（社会教育課）
調 査 担 当	棟原町教育委員会社会教育課技師 柳沢一宏
調 査 原 因	土地改良事業（ほ場整備工事）
工事主体・庶務担当	棟原町役場（開発部産業課）
工 事 面 積	約1.8ha（遺跡範囲外も含む）
調 査 期 間	1990年12月17日～1991年3月30日 うち、現地調査1990年12月17日～1991年1月7日
調 査 面 積	約100m ²
検 出 遺 構	明確な遺構は認められない
出 土 遺 物	サヌカイト片、石鎚、須恵器、土師器、黑色土器、土錘
調査資料の保管	棟原町教育委員会（文化財整理室）



航空写真

図版二
赤瀬遺跡



航空写真



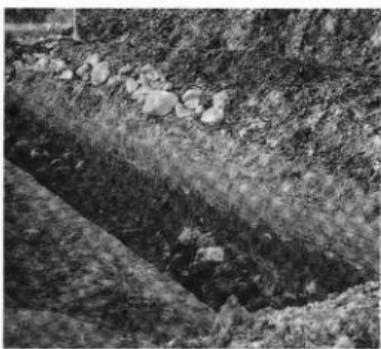
調査前（北西から）



調査風景



第1トレンチ（西から）

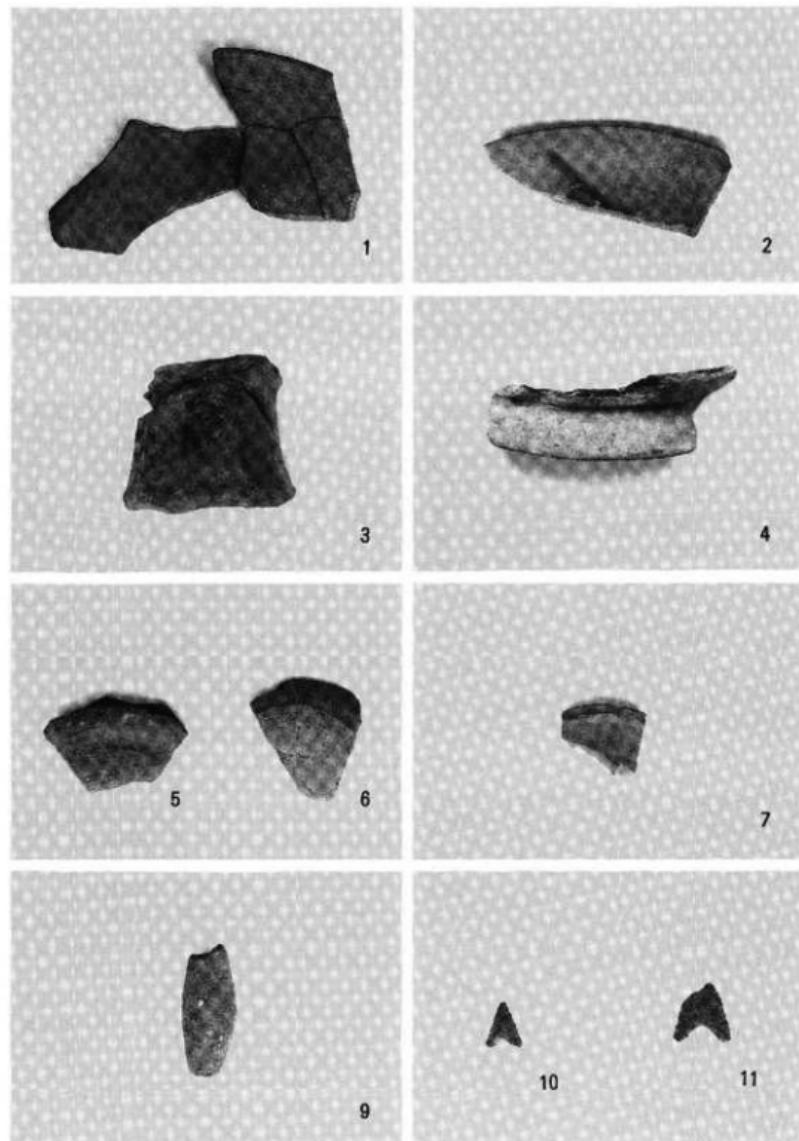


第1トレンチ（南東から）



第2トレンチ（南東から）

図版四 赤瀬遺跡遺物



赤瀬遺跡発掘調査概要報告書

株原町文化財調査概要 6

1991年 3月31日 発行

編集
発行

株 原 町 教 育 委 員 会
奈良県宇陀郡株原町大字荻原164番地

印刷

共 同 精 版 印 刷 株 式 会 社
奈良市三条大路2丁目2番6号